KARIBIB の回想

2023 年度１次隊/数学教育/渡辺 崇人

2025 年９月９日　Vol. 38

とうとうこの日がやって来ました。勤務最終日です。今日をもって、約２年間の活動が終わります。ただ、最後だからとあまり仰々しくされることが好きではないため、最終日だということは必要最小限の方々にしか伝えておらず“いつも通りに終えられればな”という気持ちが１番でした。

写真１：お別れの挨拶で

当日は毎日と変わらない朝を過ごせたため“今日もいつも通りに終えられそうだぞ”と思っていた矢先、下校時間の 30 分前に急遽校長が全校生徒を集め、集会をしてくれることに。土壇場で決まるというのが何ともウチの学校らしいなと思った反面、そのお陰でお別れの挨拶は特に考えていなかったため、壇上で思い付いたことを話していました。今振り返ると、自分で話しておきながら内容はほとんど覚えていませんが“ここから見るこの景色も今日で最後か”という思いが頭の中を駆け巡っていたことは覚えています（写真１）。

写真２：餞別と一緒に

集会の後、最後に挨拶しようと同僚を訪ねると、なんと寄せ書きと T シャツ、ポシェットの餞別を用意して待っていてくれました。T シャツは“KARIBIB”というロゴにオバンボドレス（Vol.29 参照）の布地でナミビアの国土をかたどった名前入りのワンポイントのもので、ポシェットは「あなた普段は手持ちのポシェットに貴重品を入れて持ち歩いているでしょ？だから私たちからもプレゼントするわ」と、知人にオーダーメイドしてくれた品でした（写真２）。思いがけない心遣いに本当に驚かされました。というのも職業柄、人の表情や仕草から些細な変化を敏感に読み取る方だと自負しており、良くも悪くも色々と気づいてしまうことが多いのですが、この準備については

全く気配すら感じられなかったからです。そもそも、最後の挨拶が下校の 30 分前にようやく決まる職場だったため、当時はまさかという思いでした。普段お金がないと言っている中で、おそらく持ち寄って、わざわざ首都のお店と調整して準備してくれたのだと思います。品物はもちろんですが、その気持ちが何より嬉しく、そして少し救われたような心地さえしました。というのは、活動の中で「自分はここにいてもいいのだろうか？」と存在意義について自問自答することが少なくなかったからです。Vol.37 でも少し触れましたが、ボランティアとしてサポートする立場で来ているはずなのに、実際は色々な場面でサポートしてもらうことが多く、また生きる上での考え方については彼らから多くのことを学び“自分が何かしなくても幸せそうだよな。なんなら日本人より幸せそうにさえ見えるよな。”と感じる場面が少なくありませんでした。だからこそ“ボランティアという大義名分を掲げて来てはいるものの、これは自分のエゴで、配属先からしたらむしろ余計なことをしない方がいいのではないか”と考えることが幾度もありました。

写真３：同僚と撮った最後の写真
ナミビアポーズで

この答えは今も分かりませんが、こうしてくれた気持ちは本当に嬉しく、最後はいつものように写真撮影しました（写真３）。また、同僚達からの要望で「日本に着て帰って！」ということだったので、少し恥ずかしかったですがそうさせてもらいました。出国間際の空港では、同僚達のセンスが光り“パスポートがなくても行けるんじゃないか(^_^;)”と思う程、空港スタッフには大ウケでしたね（笑）。活動中は自分が未熟な故、ロげんかも数えられない程しましたが、そんな自分を受け入れてくれたここの方々には感謝しかございません。

写真４：日本語クラスの生徒達と

そして、彼女たちにもお別れを伝えなければいけません。日本語クラスの生徒達です（写真４）。ある種、彼女たちに会うために学校に行っていたと言っても過言ではない程で、僕の居場所を作ってくれたことには感謝してもしきれません。

自分で学習してみて再認識しましたが、日本語はアニメやマンガの影響で書いたり話したりできることに憧れはあるものの、実際に勉強するとひらがなにカタカナ、漢字が混在し、そこに尊敬語や謙譲語といった語形の変化も混ざるため、習得が

著しく難しい言語の一つです。だからこそこのクラスを始めた当初は、せっかく“学びたい”と来てくれたのだからとモチベーション維持のために座学の他にもイベントや体験会を色々と開催しましたが、時間が経つにつれて一人、また一人と参加人数は減っていきました。そんな中、レベルを上げても彼女たちは最後までやり抜き、何なら僕の帰国後も自分たちだけで続けており、「先生、漢字ドリル終わったから新しいものください！」と連絡をくれるほどの熱心さには度肝を抜かれました(゜д゜)！そして、事あるごとに「日本に必ず行く！」と言って努力を惜しまない姿勢からは、僕の方がだいぶ年上ではありますが、学ぶことが多かったです。彼女たちにはもう少し何かできたらと思いましたが、来日するその日を楽しみに、日本でできる準備をして待ちたいと思います。

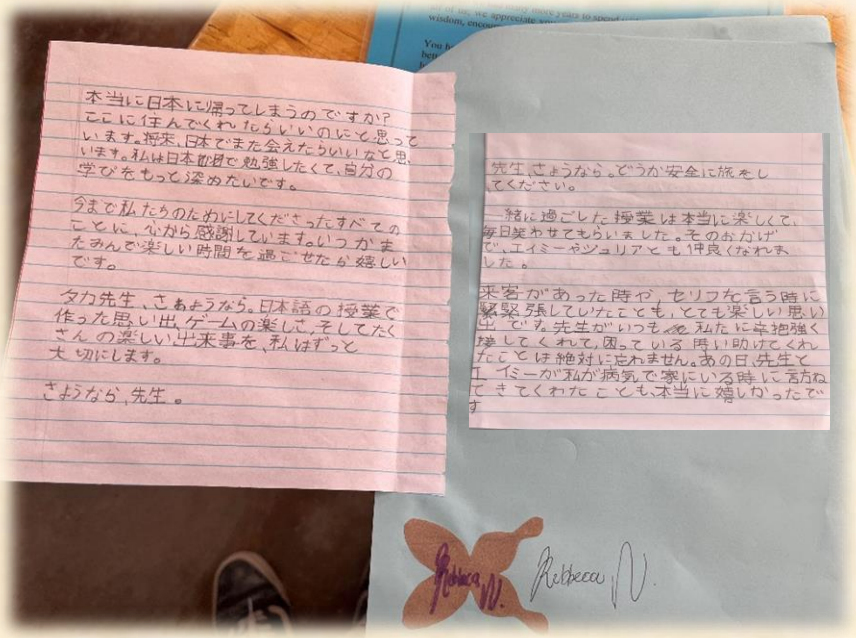

写真５：お別れのメッセージ

彼女たちからは、何度も消しては書き直した跡が伺えるメッセージカードを貰いました（写真５）。教えていない難しい表現や漢字が散りばめられているものの、文章自体は自然で、苦労して調べたんだろうなと想像できるすごく手の込んだものでした。

写真中の僕は笑顔ですが、一人で最後に学校の戸締りをしている時は少しウルっとしていたことは、ここだけの秘密です。本当に知見が広がった２年間でした。

AFRICAN SAFARI　Vol.9

今回は二種類のウシ科の動物を紹介します。

《インパラ》

南アフリカの現地語であるズールー語の「imphala（速く走る）」に名前が由来するほど足の速い動物です。オスには、ねじれた美しい角がある一方、メスにはありません。写真は後方から撮ったものですが、このようにお尻には黒い縦線が入っており、川の字に見えるという特徴があります。お肉は赤みが多く、脂肪分が少ないためヘルシーで、味は牛肉に近いです。サバンナの癒し系の一種です。

《クドゥ》

後光が差している中で見たその雄々しい姿は、某ジブリ映画の神獣を想起させるようなたたずまいでした。インパラよりも小さい規模の群れで生活し、オスは長くねじれた角が特徴的です。ゲームミートとして食べられますが、個人的には野性味がかなり強く、好みが分かれると思います。

次回：最終号です。